Users' Report vol.6

人と医療のあいだに…
JMS

Safewing cath

セーフウイングキャス

安心・安全な医療の実践へ

一つの点滴療法から考える、地域、在宅との連携

東京医科大学八王子医療センター

南多摩医療圏の中核病院として、「救急医療」、「移植医療」、「がん治療」を柱に地域の健康推進と疾病予防に日々貢献されている東京医科大学八王子医療センター。とくに「地域がん診療連携拠点病院」であることから、がん患者さんの割合が多く、地域医療との連携を図りながら対応に尽力されています。その中で、鎮痛剤の皮下注射を行うことが多いことから、医療者・患者さんの安全性、簡便性、患者さんのQOLの向上のために、安全機能付留置針セーフウイングキャス（以下SWC）が導入されました。今回は緩和ケア認定看護師である福島さんと、消化器外科看護師である金岡さんに、導入の背景やメリットなどを伺いました。

緩和ケア認定看護師
福島 里子さん

点滴療法は細心の注意を払う必要がある。

東京医科大学八王子医療センターでは、がん性疼痛管理としての鎮痛剤投与の他、化学療法など、点滴をされる患者さんが多くいます。「消化器外科でも8割ぐらいの患者さんが点滴をしており、その特性上ほとんどの方が長時間の点滴になります。中には埋め込み型のポートを使用する患者さんもいますが、使用できない場合や、他の科などでは持続皮下注射が多くなります。また健康な患者さんであれば静脈への点滴が可能ですが、状態が悪くなると血液漏れなどの問題もあるため、皮下注射に切り替えることになります」と語る金岡さん。

そして、これまでは皮下注射に金属針（27G）を使用していましたが、高齢の方においては、勝手に点滴を抜いてしまうケースもあったため、安全面、固定面においても不安があったと言います。福島さんは「たとえばモルヒネを投与している時に漏れてしまうと、また痛みが出てしまうことがあります。その度に針を刺すとなると、内出血を起こしたり、それ自体が苦痛になります。そういう場合に皮下注射に切り替えるのですが、今までの金属の翼状針では、患者さんが動いた時に針が危ないなと思っていました」、金岡さんも「皮下注射は、皮膚のやわらかい所に刺すことが多いので、金属針だと針が曲がって抜けてしまったり、金属針がそのまま出てしまうこともあって不安でした」と回想します。

また、がん患者さんならではの配慮もあったと福島さんはおっしゃいます。「がんの患者さんは薬の副作用でせん妄などの症状があります。そのため、金属針の危険を防ぐためにやむを得ず体を固定するなどの対応をしなければならないことがありました。また終末期の癌の患者さんにとって、針が体内に入っていることで、残りの大事な時間の中で何かを制限しなくてはいけなくなるのは、どうなのかな…と。そもそも皮下注射は、胸部や腹部、大腿部に刺すので、そういう部分に金属が入っているというだけで患者さんは怖いと思うんですよね」。

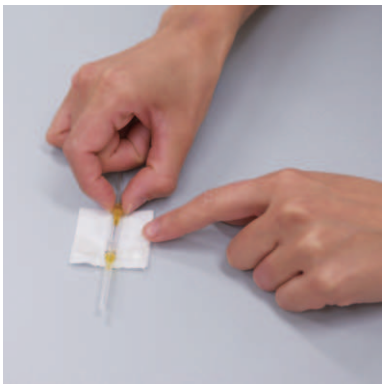
不安や気がかりの多い金属針に対する不満が募っていた中、皮下注射用としてSWCの検討が始まりました。福島さんら看護師としては、SWCの特長がリスク低減の目的と合致。主に、鎮痛目的に使用することで話は進んでいきました。

消化器外科 看護師
金岡 真規子さん

分かりやすく共有できる運用手順やマニュアルを作成し院内に周知。

導入・運用に向け、金属針よりもコストがかかるため、まず皮下注射やPCA数を収集整理し、SWCニーズを把握する作業からスタートしました。さらに院内マニュアルの改定にも長期間を費やしました。当時のことを福島さんは「皮下注射は基本的に看護師が行うため、どのような患者さんに使用するのか、これまでの留置針と比較して相違するポイントや手順、注意事項はなにかなどの全てが分かるように、それまで院内で使用していた留置針用の運用手順やマニュアルを書き加える必要がありました。また持続輸液、持続注射に関する看護手順も新たに作成しました。医療者の安全を守るという意味において、誰にでも確実に同じ手技を伝えられることは大切ですから」と語ります。

導入後の感想を「針刺し事故の心配がなく、1回1回針を捨てる必要もない。ルートを繋ぐ手間もないので、周りの人からは、ラクだという意見が出ています」と語る金岡さん。また病気の進行のため、皮膚の状態があまりよくない患者さんも多く、SWCの固定にはひと工夫して使用されているとのこと。直接、皮膚にSWCを固定するのではなく、クッションとなる綿を挟むことで刺激を弱めたり、下地にドレッシング材を貼ることで固定性を高めたりしていると言います。



皮膚が弱い患者さんに対しては、クッションとして綿を挟んだり、色々な工夫を行っていると言う。

「針」の心配がないので、在宅にもベスト。

急性期を過ぎたがん患者さんは、在宅医療に移行し、在宅医や訪問看護に看てもらったり、地域の病院に繋ぐことが多くなります。その際も、引き続きSWCを使ってもらえるよう福島さんは工夫されました。「導入直後、これは何？と言われることがあったので、動画でやり方を見せてあげました。すると、すぐに先生や訪問看護の方々も使ってくれるように。点滴を取る針とそんなに手技が変わらないので、割とスムーズに受け入れてもらえました。でも帰ったらできないのでは連携にはならないので、地域に向けた勉強会も行うようにしています」。

また持続的に点滴のコントロールが必要な患者さんには、在宅に戻った時や、在宅医療を見越した退院の練習時にもJMSの携帯型精密輸液ポンプ「アイフューザー　プラス」と組み合わせた使用を推進されているそうです。結果的に、患者さんもご家族も、余計な不安や気がかりがないことを、とても喜んでいると言います。

SWCの製品特長から、院内だけではなく、在宅での使用も始めている東京医科大学八王子医療センター。我々自身が新たな可能性に気付かされた機会となりました。

販売名：アイフューザー　プラス
医療機器承認番号：22100BZX00017000
大きな液晶とシンプルな操作パネルで、
安全性と使いやすさを追求した携帯型精密輸液ポンプ

東京医科大学 八王子医療センター

□開設／1980年
□所在地／東京都八王子市館町1163番地
□病床数／610床
□職員数／1,328名
□診療科目／総合診療科、小児科、整形外科、形成外科、糖尿病・内分泌・代謝内科、高齢診療科、放射線科、皮膚科、臨床検査医学科、血液内科、感染症科、臨床腫瘍科（腫瘍内科）、麻酔科、メンタルヘルス科、リウマチ性疾患治療センター、特定集中治療部、救命救急センター、病理診断科、歯科口腔外科、脳神経外科、神経内科、眼科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、循環器内科、呼吸器内科、呼吸器外科、心臓血管外科、乳腺科、産科・婦人科、腎臓病センター（腎臓内科・血液浄化療法室・腎臓外科）、消化器外科・移植外科、消化器内科、泌尿器科

製造販売業者
株式会社 ジェイ・エム・エス
〒730-8652
広島県広島市中区加古町12番17号
https://www.jms.cc/

2017.09.02XA211-DS
2022.03.00XA211-RA